

平尾がぐったりとした麻美の体を抱えて、机の上に横たえた。

呼吸が浅くなるほど完全に力が抜けてしまっている為に、彼女の脚はわずかに開いており、めくれたスカート裾からは白い太股が覗いている。

平尾がニヤリと笑い、美佐子に向き直る。

「大した効き目だな、いったい何を使ったんだ？」

「そうでしょう、クロロホルムなんかとは違って、セボフルランって効き目が早いよ、ほとんど一瞬だったでしょう」

「セボフルラン？」

「麻酔薬よ、医療用のね。最近じゃ歯医者でも使ってるから手に入れやすいの」

「ふーん、さすがに看護婦だな。しかし、こいつもバカな女だな。騒ごうとしなかったら、ちょっと脅かして、それで勘弁してやろうと思ってたんだがな」

「うふふつ……。またそんなこと言って、本当かしら」

「なに言ってるんだ、疑ってるのか」

「さあ、どうでしょうね。でもさ、これ以上のことこの子にしたいなら、早く決めた方がいいわよ。セボフルランって効き目が短いよね、さっきの量だったら五分もしたら醒めちゃうわよ」

「おい、そりゃちよつとヤバいんじゃないのか」

「だから、ちゃんと次の薬も用意してあるわよ」

美佐子が、再びポケットから、今度は小さなスチール製のケースを取り出す。開くと中には薬液の入った注射器が収められていた。

「——ミダゾラムって言う鎮静剤よ、これを注射してやればあと一時間はそのままよ。それだけあつたら、どこにでも連れていけるわよね。さあ、どうしましょうか？」

「……………」

平尾が机の上の麻美に目を向ける。

わずかに乱れたショートカットの髪に縁どられた、まだ幼さを残している顔。襟元から覗いてる細い首から続く胸では、まだ発達しきっていない乳房が、それでも誇らしげに制服を押しあげており、括れたウエストから続くピップラインは、豊かなカーブを描きながら、スカートに包まれた長い目の太股へと続いている。

カーテンを通った夕方の柔らかい光に照らされて、ぐったりと横たわっている麻美は、その無

防備さ故に平尾の心を強く刺激した。

この制服を剥ぎ取ってやったら、その下にはどんな体が隠れてるんだろう。裸に剥いて、無理矢理に犯してやったら、こいつはどんな顔をするだろう。

その時こいつは、いったいどんな悲鳴をあげて、どんな声で泣き叫ぶんだろう。

平尾の中で欲情がエスカレートしていく。

「やれよ」

平尾がぼつりと言った。

「えっ？」

「その薬を注射しろって言ってるんだ」

「うふふっ……。そうよね、そうこなくっちゃ」

薄い笑みを浮かべて応えた美佐子が、薬液の満たされた注射器をケースから取り出す。

注射針がギリリと光を反射した。

【4】

かすかな声が聞えた。

「……いいいえ、教師として当然のことです。それにあまり遅なるようでしたら、家までわたしが責任を持ってお送りいたしますので——いいいえそんな、迷惑だなんてとんでもない——」

血液の中に混ざりこんだ薬液が体内で中和され、濃度が域値にまで下がった時、闇の中に沈んでいた麻美の意識が覚醒をはじめた。

最初は小さな音が聞え、それが男性の声であることが判別できるほどに回復した時、次にかすかな光が見えた。光は瞬く間に真っ赤な閃光となり、急速に麻美の意識を現実へと引きあげていく。

そこは麻美にとっては地獄、いや煉獄だった。

「……………」

麻美が声にならないうめき声を漏らして瞳を開く。

途端に強烈なライトの光が目突き刺さり、同時に頭の中がガンと音を立てたように痛んだ。

先ほど見た真っ赤な光は、麻美の前方二メートルの所に置かれたビデオ撮影用のライトが目蓋を通して見えたものだった。つまりそれは彼女の血の色だったのだ。

麻美は、まぶしさに思わず閉じてしまった目を再び開く。今度は少しでした。陽光のように明るいうライトの向こうに、三脚の上に乗ったビデオカメラと、電話の受話器を持って、応接セツトの低い椅子に座った平尾の姿が見えた。

「――では、これで失礼いたします。先ほども申しましたように、遅くなるようでしたら麻美君はわたしが家までお送りいたしますので、ご心配なさらないように……。はい、では失礼します」
椅子に座っている平尾の態度は、そんな丁寧な言葉使いとは裏腹に、テーブルに足を投げ出し、ふんぞり返った横柄なものだった。

平尾が電話を切り、唇を冷笑に歪めた。

麻美はようやく混乱から回復し、自分の置かれた状況を把握しはじめていた。

体を動かそうとした時、両手両足が何かによって固く拘束されていることに気付く。パニックがやって来た。

「えっ？ い、嫌っ！ 何なの、これ！」

麻美が叫びをあげ、激しくもがく。

しかし、両手にはめられた手錠と両方の足首を繋ぐ足枷は、あざ笑うかのような金属音を立てただけでビクともしない。しかも、体を起そうとした途端、詰められている首輪が喉に食いこみ、気管が圧迫された。

麻美はしゃがれた声をあげ、再び拘束されている椅子に体を倒す。

そんな彼女をニヤニヤと薄笑いを浮かべて見ていた平尾が、ライトの向こうから歩み寄ってきた。

「目が醒めたようだな、まだ注射されてから五十分ぐらいなもんなのに、やっぱり若いということとは、回復も早いつてわけか」

「先生、なに？ 何なんですか、これ！」

「決まってるだろうが」

平尾が床に膝をつき、椅子に拘束された彼女の瞳を見詰める。

「これからお前の体を使って遊ぶための用意だろ」

「遊ぶ……つて？」

体の一番奥からじわりと湧きあがってきた冷たいものが、全身に広がっていく。

「まさか……まさか先生……まさか、わたしを……」

「分からないとは言わないよな」

平尾がニヤニヤと笑いながら麻美の顔に手の平を当て、頬の柔らかさを楽しむようにさすりあげてきた。

「い、イヤッ！」

顔を背けようとした途端、喉に食いこんだ首輪が呼吸を止めた。

「ほらほら、暴れたら苦しむだけだぞ」

「お願い、外して下さい、お願いです家に帰して……」

「心配しなくていいぞ、今、家には電話を入れといたからな。今日は門限無しになったんだ。つまり、じつくりと楽しめるってわけだよ」

頬を撫でる平尾の指が唇に触れた。指先が口の中に入って来ようとした時、麻美が歯を立てる。

「……………」

平尾が、痛みと言うよりも驚きの声をあげて顔から手を引いた。

浮かべていた上辺だけの微笑が掻き消え、代りに怒りの表情が浮びあがってくる。大きく引かれた手が、それ以上の力をこめて振り下ろされてきた。

「ひいっ！」

頬で鋭い苦痛が弾けた。

「いい悲鳴だ」

「ああっ！」

続けて平尾が麻美の髪の毛を鷲つかみする。首が音を鳴らすぐらいに強くグイッと引かれ、怒りと興奮に滾った目が睨みつけてきた。

「今夜はそんな声を何度も聞かせてもらうぞ。俺が満足するまで何度もな！」

「いや……いや、イヤッ！ 嘘よ、こんなの嘘……こんなこと信じられない、嘘だよ」

「ハハハッ！ 嘘かどうかすぐに分かるさ」

制服越しに乳房をつかんだ手が、まだ薄い膨らみを強くひねりあげる。

「あつ、うううっ……………」

苦痛にうめく麻美の唇に薄い塩の味が広がった。それは、今夜彼女が流すだろう最初の涙だった。

「あらあら、もうはじめてるの」

その声は麻美の横から聞えた。

反射的に振り向くと、そこには微笑みを浮べた美佐子が立っていた。彼女が麻美を無視して、平尾に言う。

「トイレに行っている間に一人ではじめちゃうなんてズルイわよ」

「まだこれからだって、お楽しみはな」

乳房をつかんでいた手が離れ、平尾が立ちあがると、麻美が泣き声の混ざった声で美佐子に哀願する。

「助けて、お願い、助けて下さい……………」

麻美にとって、同性である美佐子が唯一の救いだった。

この人なら、この看護婦さんなら平尾先生を止めてくれるかも……。だって同じ女なんだから、わたしに酷いことできるはずないよ。

「うふふっ……。駄目よ、美樹崎さん、いえ、麻美。あの時トイレに居たのが不運だったわね、女の体ってデリケートなんだから、これからは生理が近い時は早い目に手当てしておかなくっちゃね」

からかうような口調の美佐子の言葉に、麻美は唯一の救いの道が閉ざされたことを思い知らされる。

「どうしたのさ、麻美、そんな顔をして？」

楽しげな表情を浮かべたまま、美佐子が先ほどまで平尾につかまれていた乳房に触れてきた。

「いやっ！」

反射的に体を逸らそうとしたとき、またもや喉に首輪が食いこんだ。

「可愛いお乳……。まだそんなに触られたこともないんでしょうね」

美佐子がゆっくりと膨らみを揉む。まだ少し痛みの残っている乳房に感じる指の動きは優しく微妙で、セックスを意識せずにはいられないものだった。

麻美の喉からかすれたすすり泣きが漏れる。

「おい、美佐子。そろそろはじめようか」

そんな二人を冷酷な笑いを浮べて見下ろしていた平尾が言った。

「ええ。でもわたしの顔は写さないですよ」

「分かっているって」

麻美がはっと顔をあげ、平尾に涙に濡れた目を向けた。

「なに？ 何をするの？」

「ビデオで撮ってやるんだよ、お前の恥ずかしい姿をな」

「えっ！ いやっ、やめて、やめて下さいそんなこと、お願いっ！」

懇願する麻美を無視して、平尾がライトの向こうのビデオカメラのファインダーを覗きこむ。

「あなた、あのトイレでわたしたちの秘密を見たでしょう」

美佐子が後ろから麻美の制服の胸に手を伸ばしていく。

「だから、わたしたちも貴女の秘密が欲しいのよ」

「やめて、お願い。絶対に、絶対に他の人には言いませんから、お願いっ！」

「そんなこと信用できないわ。それに、わたしたち貴女のような綺麗な子のペットが欲しいのよ、何でも言いなりになる、ペットがね」

「イヤアッ！」

麻美が絶望の悲鳴をはりあげる。

美佐子が麻美の制服のボタンを外しだすと、その前で、平尾の操作するビデオカメラがまわりはじめた。

平尾はファインダーを通して麻美の姿を見つめる。

赤い首輪によって椅子の高い背もたれに繋がれ、後ろにまわされた両手首には銀色の手錠、そして、足首には、太股をある程度まで開けるように革性の輪を繋ぐ鎖に余裕を持たせた足枷。それらの物によって拘束される制服姿の美少女。

今からその女が、同性の手によって服を剥がされ、体の奥に秘めた恥部の全てをさらけ出されようとしている。

見つめる光景は媚薬にも似て、彼を昂ぶらせていく。

美佐子が麻美の制服の胸を開き、下のブラウスのボタンを外した。

「あら、あなたのブラ、フロントホックじゃないのね。こんなに可愛いんだから下着にもおしゃれしくつつちゃ」

美佐子が優しげに囁いてから、一変して乱暴な手つきでブラジャーを引きあげた。

ずれた白いカップの下で、二つの小振りな乳房がむき出しになる。その膨らみは牛乳を固めたかのように白かったが、片方には、先ほど平尾がつかんだ指の形に薄く青痣が浮かんでいた。

美佐子が乳首に触れた。

麻美がビクリと体を震わせる。そんな彼女の反応に、薄笑いを浮べた美佐子が両方の尖りをつまみあげ、同性ならではの、触れるようなタッチで愛撫しはじめる。

「うっ……」

麻美が唇を噛む。

「ふふっ……。どう？ 気持ちいいでしょう、生理の時だものね、体が敏感になって当然だわ……」

美佐子が耳に息を吹きかけるように囁くと、麻美が首を弱々しく首を振った。

「駄目よ、隠しても。ほらほら、貴女の乳首、こんなに固くなって来たわよ……。気持ちいいんでしょう？」

「いや、いや、いや……」

麻美が、愛撫される指の動きに合わせて体をよじり、幼い子供のように首を振り続ける。

「強情な子ね、ペットはご主人さまの質問には正直に答えなくっちゃいけないのよ。どうやら貴女には特別なお勉強が必要みたいね」

「お願いです、酷いことしないで……」

「それは貴女次第でしょう」

美佐子が麻美から離れ、部屋の片隅に置かれていた黒いアタッシュケースを下げて戻ってくる。不安げな視線を向けてくる麻美を楽しむような微笑を浮かべ、美佐子がケースを彼女の前に置

いた。

「貴女、SMって言葉は知っているわよね。このホテルはね、そんな趣味の人たちが使う所なの、だから色々な道具がそろっているのよ、今貴女を写しているビデオカメラもそうだし、こんな物もレンタルしてくれるの」

美佐子がアタッシユケースを開くと、そこには様々な陰具が収められていた。

麻美が目を逸らすこともできずに顔を引き攣らせる。

「うふふっ……」

美佐子がアタッシユケースの中から、片手に収まるほどのステンレス製の小箱を取り出した。

「それにね、いくら悲鳴をあげても、ここではそれが普通のことだから誰も不信には思わないのよ。まあ、部屋の防音以上の声をあげられたらだけど」

美佐子が麻美の目の前で小箱を開いた。途端に、病院を連想させるようなエチルアルコールの匂いが香る。

小箱の中に収められていたものは、アルコールを染みこませた脱脂綿の上に並べられた数十本の鋭い縫針と、一卷の釣糸だった。

「ほら、後で化膿したりしないように、ちゃんと消毒してあるわ」

「化膿って……。まさか、その針を……」

麻美が拘束された体を必死にもがらせる。

「い、イヤッ！」

「あなたが素直じゃないからでしょう。この針でたっぷり罰を与えてあげるわ」

「お願い。言う通りにしますから、お願いですから、そんな恐ろしいことやめて」

麻美が涙声で哀願する。しかし、そんな彼女を見つめる美佐子の瞳は、鈍い欲情の光を湛えていた。

「駄目よ。いいペットになる為には騾が必要なの」

美佐子が小箱の中から一本の針をつまみあげ、再び麻美の背後にまわりこむ。

「お願い、あぁっ……お願いですから……!」

麻美がすすり泣きの声を高めた。

美佐子が麻美の背中から手をまわして、左の乳首をつまみあげる。

「あら、もう柔らかくなってるわ。ちゃんと固くして感じるようになっておかないと駄目じゃない」乳首は指のあいだで数回こねられただけで、すぐに頭をもたげた。

その乳首に横の方向から縫針が触れる。

「貫き通してあげる……」

美佐子が囁き、手に力を加えた。

針は鋭い切っ先で一瞬のあいだだけ乳首の表面を押し下げ、くすんだ色の皮膚を突き破って内

にすべりこむ。

「……………」

言葉にならない絶叫を振り絞り、麻美が拘束された体を震わせる。ガクガクと反射的に頭が振られ、首輪が今まで以上に首に食いこむ。

「うぐっ……………！ ゆ、許して、あぁっ！ ごぼっ、お、お願い許してっ！」

美佐子は努めてゆっくりと針を進める。笑いの形に歪んだ口から舌先が覗き、ルージュに彩られた唇をぺろりと舐める。

「この感触とつてもいいわ。ほら麻美、分かる？ 貴女の乳首は今、切り裂かれてるのよ」

「ううっ……………」

喉の奥から苦痛のうめきを絞り、麻美が歯を噛み締める。頬から落ちた涙がスカートを濡らしていく。

ようやく針が乳首を横方向から貫くと、美佐子は、更に指を進めて小さな尖りを真一文字に縫った。

傷口から小さな血の球が膨れあがり、朱に濡れた銀色の縫い針が輝く。それは麻美の乳首に飾られた陰惨なアクセサリーのようなだった。

「痛い……………本当に痛い……………許して、もう許して……………」

麻美がすすり泣きながらうなだれる。

「針はまだ沢山あるのよ」

美佐子の言葉を聞き、麻美が恐怖に引き攣った目を向ける。

「ねぇどうなの、さっきわたしが貴女のお乳を弄ってあげた時、感じたかしら？」
涙に濡れた瞳を一瞬閉じ、麻美が観念しきった声で囁く。

「は……………い……………。気持ちよかったです……………」

「ふふっ……………。そう、じゃあ、お礼を言いなさいよ。感じさせて頂けてありがとうございますって、ね」

「か……………感じさせて頂けてありがとうございます……………」

「同じ台詞を繰り返すだけなんて、ずいぶん芸のないペットね。その針をライターであぶってあげたらもっと賢くなるかしら？」

「わたしのお乳を……………気持ちよくして頂いて、ありがとうございます……………」

麻美の言葉は、すすり泣きでかすれて消えた。

美佐子によって上半身の服を開かれ、ブラジャーを奪い取られた麻美は、素肌をビデオカメラの前にさらけ出した。

手の平にすっぽりと収まってしまふほどの大きさしかない乳房は、嗚咽混じりの呼吸に浅く上

下しており、その先端では、針に縫われた乳首が薄く血を滲ませていた。

「さあ、脚を椅子にあげて、大きく股を開くのよ」

美佐子が背後から麻美に命令した。

麻美のすすり泣きが一段と高まる。美佐子の言う通りにすれば、カメラの前にスカートの内をさらけ出してしまうことになる、しかも、彼女は生理中なのだ。

麻美が目を固く閉じ、体を固く強ばらせる。その途端、美佐子が乳首を縫われている乳房に針をグサリと突き刺した。

「あぁっ」

麻美が目を見開き、自分の乳房に深く埋まっている縫い針と、針をつまんでいる美佐子の指を、信じられないものでも見るように凝視する。

「このまま根元まで埋めこんであげましょうか？」

美佐子が麻美を見下ろし、針をわずかに押し下げる。

「イヤッ！ お、お願いっ！」

声を振り絞って哀願する麻美に、美佐子が残酷な笑みで応え、再び針を進めはじめる。

「あぁっ」許して！ 痛いの！ とっても痛いのっ！ 死んじゃう、わたし死んじゃう……！」

苦痛に絞り出された汗に濡れた乳房が、荒い息に大きく上下し、白い膨らみの表面を冷たい汗と混じり合った血が、一筋の赤い線を引いていく。

麻美の苦痛の叫びは、美佐子が針のほとんど全てを乳房の中に埋めこむまで続いた。

深くうつむいたまま、すすり泣いている麻美の前で、美佐子が針を収めた小箱を再び開く。跳ねあがるように麻美が顔を起した。

「イヤっ！ もうイヤ……お願い、もう痛いのはイヤなんです……」

美佐子が無言のまま、脱脂綿の中から針をつまみ出す。

「分かりました、分かりましたから、しないで、もうしないで」

スカートをひるがえして、麻美が足枷で繋がれた脚を椅子に持ち上げた。

「どうしたの、わたしが命令したのは、それだけじゃなかったでしょう」

美佐子が針を麻美の乳房に寄せ、一本目の針のすぐ隣に切っ先を押しつける。

嗚咽を漏らした麻美がギュと瞳を閉じる。押し出されてきた涙が頬を伝って零れ落ちた時、彼女が脚を左右に広げた。

「あら、もつと逆らっても良かったのに」

どこか残念そうな表情を浮かべて、美佐子が縫針を小箱に戻した。

ようやく収まりかけていた乳首の痛みに加わった乳房からの苦痛が、麻美の絶望感を更に深めていく。

嗚咽に喉を震わせて顔を伏せると、針を貫き通されて薄い血にまみれても、まだピンと突き立っている自分の乳首が見えた。

恐ろしさに背筋が冷たくなった。だけど、残酷な仕打ちを受けた乳房を見つめる内に、彼女の心の奥底にかすかな、ほんのかすかな、疼きのようなものが生じてくる。

「どう、麻美、なかなかステキなアクセサリーでしょう？」

問いかけてきた美佐子の目付きに、麻美は自分の心を見透かされてしまったような恥ずかしさを覚える。

「取って、抜いて下さい……」

「ダメよ、まだお楽しみははじまったばかりじゃないの。ほら、今度はこの脚を——」

美佐子が、麻美の両膝に手をかけて力一杯に左右に押し広げた。

「うっ！」

何とか股間をおおっていたスカートが完全にめくれあがり、関節の鈍い痛みと共に太股の付け根に腱が浮かびあがる。

「これからアソコを弄ってもらうんだから、これぐらいは開いておかなくっちゃ」

「やっぱり……やっぱり、まだ許してもらえないんですね……」

「なに言ってるの、当たり前でしょう」

麻美が脅えた目で見つめる中、美佐子が床に置かれたアタッシュケースを開き、ビニール製の細い紐の束を取り出した。

「脚を縛ってあげるわ。動いたらどうなるか、もう分かっているわね」

美佐子が麻美の膝の関節に紐を巻きつけ、椅子の肘置きに股間を極限まで開いた状態で固定した。

「いい格好よ……とってもイヤらしいわよ。それにここが——」

床に屈みこんだ美佐子が、麻美の股間を見つめてくる。

白いパンティの中央は、生理用のナプキンによってこんもりと盛りあがっている。

「ここが、この膨らみが男の目を引くのね」

美佐子が膨らみに指を当て、パンティの上からナプキンを強く押した。

「あっ……」

湿った不快感が秘部に広がり、白いパンティの股間に薄っすらと経血が滲み出してくる。

「あらあら、たっぷり吸ってるわね。二日目だって言うのに、ちゃんとナプキンを交換してるのかしら」

嘲りが透けて見える声で言うと、美佐子が指に憑いた血を麻美の頬にこすりつけてから立ちあがった。

「さあ、いよいよね。いよいよ、わたしたちのペットの一番恥ずかしい所を見せてもらおうかしら」

「いや……。ああっ……。お願いです、そんなのイヤ……!!」

麻美が、無駄とは知りながらも、椅子に縛りつけられている太股を懸命に閉じようとする。

自分のもつとも秘めた所を無理矢理にさらけ出され、ビデオに撮影されようとしている。そればかりか自分は今、生理の真っ最中なのだ。

美佐子がアタッシュケースから、今度は、刃の部分を鞘に収めたナイフを取り出した。

鞘を抜き、鋭く尖った剣先を、針に縫われている乳首に押し当てる。

「ひっ!!」

「まだ暴りたい？ それとも……」

ナイフの切っ先が乳首を撫でる。敏感になっっている尖りに走る冷たい刃の感触と恐怖によって、麻美の乳房にぷつぷつと粟が浮きあがってくる。

「し、しません、おとなしくします、だからやめて、もうやめて……」

「そうよ、それでいいのよ」

美佐子がナイフを乳房から離し、麻美の太股の付け根にこじ入れて、パンティの腰の部分を手で持ちあげた。

「暴れてたら、あなたのここの柔らかいお肉、一緒に切っちゃうものね」

美佐子がナイフを引いた。

*

平尾がビデオカメラを握り締めた。

ファインダーの中で、美佐子の持つナイフが麻美のパンティを切り裂いた。

拘束されて広げられている太股がヒクンと跳ね、内腿の腱が緊張に引き攣る。

「さあ、みんな見せてごらんさい」

「ああっ！ ダメ、ダメッ！」

美佐子の手が伸び、切断されたパンティを端から引き剥がしていく。

白い下腹に髷るように薄い陰毛があらわれ、ふっくらとした柔肉が合わせ目の上端を見せはじめる。内腿に両方から引かれていくために、麻美の陰唇は楕円形に広がっており、クリトリスを内に秘めた包皮ばかりか、肌色の柔肉の奥に、経血で汚れた繊細な薄肉までを覗かせている。

切り取られたパンティの残骸が床に落ち、内側にテープで貼られている経血をたっぷり吸っ

たナプキンが重い音を立てた。

美佐子が麻美の背後にまわり、後ろから伸ばした手を柔肉の両端に押し当てる。

「さあ、貴女の恥ずかしい所の奥の奥まで、イヤらしい穴まで見せてもらおうかな」

楽しげに言った美佐子が、赤いマニキュアに飾られた指で麻美の柔肉をつまみ、残酷なまでに大きく左右に押し広げる。

剥き出しにされた奥底の秘肉がピクンと収縮し、滲み出してきた真っ赤な経血が桜色の粘膜に滲んだ。

「やっぱり男のぶつといモノを啜えこんだことのない所よね。とつても可愛いわよ。ほら、平尾先生にちゃんと全部写してもらいましょうね」

麻美が高めたすすり泣きの声を聞きながら、平尾がビデオカメラのズームボタンを押した。

一瞬、ぼやけた画面が自動フォーカスによってピントが合い、麻美の秘部が大写しになる。薄い陰毛に飾られた、今は、美佐子の指に広げられて歪んでいる柔肉。

上端の合わせ目に、包皮の中から辛うじて頭を覗かせている小粒なクリトリス。

複雑に折り重なった内側の薄肉の狭間でポツリと開いている尿道口は、周囲の粘膜を引かれて横長の円となっており、その下では、肉の凹凸に囲まれた膣口がまだ固く入口を閉ざしている。

煌々とした撮影ライトに照らされ、粘膜に艶が浮くほどに広げられた、まだ男を知らぬ無垢な処女の性器の隅々までを、平尾は克明にビデオに収めていく。

「いつまで泣いてるのよ、顔をあげなさいよ。ちゃんとアソコと一緒に写してもらわなくっちゃダメでしょう」

「いや……もう、イヤです……。もう充分でしょう、許して、許して下さい……」

麻美が首輪で拘束された首を弱々しく振る。

「うふふつ……嬉しいわ、逆らってくれるのね。じゃあ、今度は貴女のクリトリスを乳首と同じように針で可愛がつてあげましょうか？」

美佐子が麻美の柔肉の上端に触れ、小さな尖りをそつと撫でた。

「あんっ……！」

「ほら、とつても感じる所でしょう、針で貫かれたら乳首とは比べ物にならないぐらい痛いわよ」「そ、そんなことしないで、お願い、しないで！」

麻美が顔を起し、ビデオカメラのレンズに向けた。

悲しみに歪んだ麻美の表情と、絶望の涙に濡れそぼっている瞳。振り乱れた髪と、恥辱に赤く

染まった頬――

レンズを通して見つめる平尾の全身に、押え切れない欲望が膨れあがった。

「美佐子、交代だ、このままじゃおかしくなっちゃう」

美佐子が、麻美のクリトリスを弄っていた手をとめて、振り返ってくる。

「ふふっ……。本当ね、凄くいきり立てちゃって」

平尾のスボンの盛りあがりを見つめ、舌なめずりするような淫らな表情を浮かべる。

「ねえ、じゃあさ、口でしてあげましょうか？ 舐められながら麻美を虐めるつてのも楽しいかもよ」

「いいアイデアだ。まったくお前らしいな」

平尾がズボンのファスナーを下ろす。粘液で濡れた下着から、赤黒く勃起しきつた淫茎が突き立った。

「ああっ！」

驚きの声をあげたのは麻美だった。視線を向けると慌てて目を逸らす。

「そうか、勃起した男のモノは初めて見るってわけか」

平尾が麻美に近づき、必死に背けている目の前に張り詰めた肉塊を突きつける。

「遠慮するなよ、これもお勉強だ。それにもう少ししたら、お前の中にこれが入るんだ、たっぷり腹の中を掻きまわして、楽しませてやるからな」

「ゆるして……」

脅えきつて身をすくませる麻美の姿に、平尾の股間が更に熱くなり、膨れあがった亀頭の先端からトロリと透明な粘液がしたたった。

そんな平尾の足元に美佐子が屈みこみ、淫茎を両手で捧げ持つように支え、開いた唇に亀頭を咥えこんだ。

「うっ……」

走った快感に喉を鳴らし、平尾が、亀頭を這いまわる舌の感触を味わいながら、縫針を収めた銀色の小箱を取りあげた。

「今度はどこに突き刺してほしい？」

麻美が驚愕に目を見開く。

「そ……そんな、ちゃとしてるのに、言われた通りにしてるのに！」

麻美が泣きじゃくり、拘束された体を激しくよじる。

「そんなことは訊いてないだろう。じゃあ、まずは、このオッパイからかな」

平尾が無傷の乳房を手を触れ、柔らかな肉の膨らみを撫でまわす。

「いやっ、いやっ、いやっ、イヤッ！」

ギュと握り締めた乳房に針を近づけた時、美佐子が亀頭の先の窪みに舌を当て、こすりあげてきた。

尿道口を舐められる鋭角的な快感の中で、平尾が針を根元まで一気に突き刺す。

「ああああっ!!!」

容赦のない責めに麻美が絶叫し、全身を震わせる。

「うふふっ……。とってもいい声だわ……」

囁いた美佐子の赤い唇は、亀頭から吸い出した男の粘液の糸を絡みつかせていた。

「もつとだ、美佐子、もつと舐めるんだよ」

「分かってるわ。貴方も麻美の今みたいな声、もつと聞かせてちょうだいね」

ニヤリと笑いで答えると、平尾は、小箱から取り出した別の針をぐさりと音を立てるような容赦のない勢いで乳房に埋めこんだ。

「ギヤアアッ！ もうイヤ、もうイヤ！ 何でもする、何でもしますから許して、お願いです許して下さい」

再び麻美が絶叫し、鳥肌立った乳房に苦痛による冷たい汗が流れ落ちる。

「そうかい、何でもするのかい。じゃあな、もつと苦しみなよ、もつと泣き叫んで俺を楽しませな！」

みたび、針が麻美の乳房を引き裂く。

麻美が体を反り返し、細い喉を嗚咽に震わせた。

美佐子の唇と舌の動きが大きくなり、股間から全身に広がった快感が、平尾の欲情を狂気にまで高めていく。

「次だ、次はこんなのはどうだ！」

平尾が、血と汗に濡れた麻美の両方の乳房を、根元まで埋まった針の頭を避けて驚つかみ、手の中でよじれる白い肉のまだ芯を残したような手触りを味わいながら、強く絞りこんで揉みしだく。

「……………」

麻美のあげた絶叫はほとんど声にならず、短く途切れた断末魔の息遣いのようだ。

「痛いか、ハハッ！ そうだよな、針が入ってるんだからな！」

乳房が滲ませる血と汗に濡れた平尾の手が、麻美の乳首をまさぐり、つまんだ指でひねりあげる。

「でもお前の乳首、こんなにピンピンになってるぞ、もつと針が欲しいって言ってるぞ」

無傷の乳首の上側に針をあてがう。

「見ろ、見るんだ！ 乳首が貫かれるところを見るんだよ！」

平尾が麻美の髪をつかんで引き、無理矢理に顔を乳房に向けさせる。

「目を閉じるなよ。閉じてみる、もつと苦しませてやる、乳首を引き千切ってやるからな！」

「ゆ、許して……」

悲痛な色を湛えた麻美の瞳を見つめ、平尾が針で乳首を上から下へと一気に貫いた。

「ヒィッ！」

麻美の瞳からふつと光が失せ、体ががくりと椅子に倒れこんでいく。

「おい、麻美、麻美！ チツ、気絶かよ。まあいい——」

平尾が股間にうづくまっている美佐子を押しつけた。

「なに？ どうしたのよ、ちゃんと飲んであげようと思ってたのに」

美佐子が訝しげな顔を向けてくる。

「尻をまくれよ、抱いてやる」

美佐子が妖艶な微笑みを浮べ、唇についた粘液を舐め取った。

パンティを脚から抜き取ってスカートをめくりあげると、美佐子が前屈みになって、目の前に裸の尻を突き出してきた。その両手は、気を失っている麻美を拘束した椅子の肘置きを握っている。

背後に立ち、尻房をつかんで割り広げる。

厚い肉の狭間で、愛液にベツトリと濡れそぼり、黒々とした陰毛を絡みつかせている女陰が口を開く。

その、麻美のものと比較すると食欲ささえ感じさせる美佐子の秘部を、平尾が弄りはじめる。

「あぁっ……」

すぐに指は、生暖かく透明なぬめりに粘ついて細い糸を引き、ほぐれて半ば口を開いている膣口が奥の赤い肉を妖しく蠢かせる。

平尾が陰茎を握り、張り詰めた亀頭で膣口周囲の肉を押し下げた。

「じらさないで……お願い、早くぅ……」

美佐子が快楽を待ち切れぬ女の声でねだり、ゆすった尻を押しつけてきた時、平尾がつかんだ尻肉に下腹を叩きつけ、一気に深く突き入れた。

「うぐっ」

ゴリツと亀頭に当たった子宮が歪み、重いうめきをあげた美佐子の全身に小刻みな震えが広がった。

淫茎全体を包みこんでいる膣肉の熱さと、内壁に刻まれた細かな襞の味わい——平尾が昂ぶりのままに美佐子の尻肉を驚づかみ、腰を激しく、そして大きく振りはじめた。

「あぁぁっ……いい、イイツ！ もっと突いて、いっぱいキテ、あぁっ、もっと、もっとデキッ！」

美佐子がある喜びの叫びに平尾のうめきが重なり、彼は、ぐいぐいと淫茎に絡まってくる膣穴の絞めつけを貪る。

「今日は一段と絞めつけてくるな」

「だって、だって、この子が、この麻美が——」

美佐子が顔をあげて、椅子の上でぐったりしている麻美を見る。

「この子見てると堪らなくて、この子虐めてると、堪らなくなっちゃって」
「そうかい、だったら一度イツときな」

平尾が手を美佐子の下腹にまわし、包皮から顔を出すまでに突き立っているクリトリスをつまむ。

「あつ！ だ、ダメっ、そこダメ、感じすぎちゃう！」

「だからイイんだろう」

指の狭間で捉えた固い尖りをキュとひねる。

「ヒウツ」

深く息を吸って喉を鳴らすと、美佐子の体がビクンと反り返り、床に向かって崩れ落ちようとした。

「おっと、俺はまだなんだよ」

平尾がつかんだ尻を引き寄せ、前後に揺さぶりながら腰を振りたてる。

「うっ、ぐっ、ぐっ、あぐううっ……！」

半ば力の失せた美佐子の体が、平尾に操られるままガクガクと揺れ、部屋に淫茎が柔らかくほぐれきった臈肉をこねる時のぬめった音が広がっていく。

「ああつ、また……また、ああんっ……！」

美佐子の尻が再びくねりだし、臈穴が臈がうねるように絞めつけてくると、平尾が射精に向けて激しく腰を振りはじめた。

「また、またクル、またイキそうっ！」

美佐子が椅子の肘置きをつかみ、下を向いた二つの乳房を波打たせるように動かしながら、腰を前後に振る。

数度のタイミングのズレの後、平尾の腰の動きと美佐子の尻の動きが同調し、二人の接点から淫らな肉音が零れる。大きく前後する陰茎に掻き出された愛液が、彼女の太股と、平尾の鼠径部を濡らしていく。

下腹の奥に生じた熱い射精の衝動が、絞り出すようなうめきとなって平尾の喉から漏れる。

「中に頂戴、中に出して、いっぱい出してっ！」

美佐子が、受け入れている淫茎を中心にして尻をぐるりとまわした。

キツク食い絞めている臈肉に淫茎をよじられる時の味わいと、亀頭にこすれる子宮頸部の異物感、そして、下腹で潰れて歪む尻肉の柔らかな量感――

重なり合った肉の悦びがひとまとめになって全身を走り、引き出された射精の快感が一気に弾け飛んだ。

「ああんっ！ 凄いつ……！」

同時に美佐子もまた絶頂の叫びに喉を震わせ、ビクビクと震え続ける体を床に倒す。

平尾は強く美佐子の尻肉をつかんだままで、射精の最後の飛沫を彼女の奥に放った後、その余韻を味わう。

床では、突っ伏した美佐子が荒い呼吸に背中を上下させて、焦点を失った瞳を見開いている。

平尾が、精液と愛液にまみれた陰茎を抜き出す。

膣口が一瞬、赤く充血した内側をさらけ出して、注ぎこんだ白濁を滲ませながらゆっくりと窄まっていった。

「ほら、起きろよ。これでちよつとは満足しただろう」

顔をあげた美佐子が、ふらつく腰を支えて体を起し、平尾の唇に自分の唇を押しつけた。濃い唾液に濡れた舌が平尾の口の中をまさぐり、顔を離す。

「まだよ……。見せて、もっと残酷に麻美をなぶるところを……。わたしに見せて……」

美佐子が欲情に底光りする瞳を平尾に向けたまま、その視線を引きずるようにして床に膝をつく。汚れた淫茎を捧げ持ち、唇に含む。

まだ弱く勃起を保持しているそれを吸いあげ、頬を窄めながら顔を前後に振るようにして、唇と舌で平尾を刺激する。

「本当に好きな奴だな」

平尾が、美佐子の唇の奉仕を受けながら、椅子に拘束された麻美を見下ろす。

針によつて手荒く蹂躪された乳房と、広げられて拘束された太股の中心で剥き出しになっていく経血に汚れた性器に粘りつくような視線を這わせる。

最初はむず痒いだけだった感触が、美佐子の執拗な舌使いによつて、次第に本物の快感に転じていく。

急速に昂ぶりが回復しはじめた。

「ねえ、鞭を使って目を醒まさせてやりましょうよ」

平尾の隣で美佐子が、麻美に目を向けて言った。

「いや、鞭は後だ。それよりも、もっと面白いものを見せてやるよ」

残酷な薄笑いで応じると、平尾が、アタッシュケースの中からバイブレーターを取り出した。その黒いシリコン製の陰具は、尻から伸びるコードによつて電池ボックスを兼ねるスイッチに繋がるタイプのものであったが、通常のものではなく、その大きさと短め目の長さから肛門用のものであることが分かった。

「そんなんじゃないわ、お尻の穴にねじこんでやるなら、もっと太くて大きいのでないと……」

「いや、これの方が良いんだよ。まあ見てろ、期待には背かないぜ」

平尾が麻美に向き直る。

「ほら、起きろ」

針で貫かれている乳首をつまみ、ひねりあげる。

目を醒ました麻美が、平尾の顔と手に持った陰具に脅えた視線を交互に向け、嗚咽混じりの囁きを漏らす。

「これ以上……これ以上なにをするの？ もう充分でしょう……お願いゆるして、これ以上、酷いことしないで……」

「これ以上？ ハハッ、何を言うかと思ったら、まだはじまったばかりじゃないか」

平尾がバイブレーターのスイッチを入れる。低いモーターの音が響き、陰具がその亀頭の部分を淫らにくねらせはじめる。

「ほら、よく見るんだ、これがお前の『初めての男』だ。このバイブでお前の処女を奪ってやる。クククッ……しかもこいつは尻の穴用のものなんだ。どうだ、一生の思い出に残る喪失の『相手』だろう」

麻美が引き裂かれるような絶叫に喉を震わせた。

以下、次回へ